

## ◇熊野権現

天竺の常世思想が邪馬台国に流れ来たったのは、シュメールに繋がるドラヴィダ系アンドラ王朝、もしくはマガダ国と何らかの接触があつたことだろう。前述したバラモン神の教え以外に、マガダ国王にまつわる有名な逸話が『神道集』に熊野権現事として記されている。熊野でも、天台山の山王となつた王子信が神武天皇御代に熊野権現となつて現れたとする伝説が熊野権現垂迹縁起として伝わっている。

## 『神道集』の熊野権現事と熊野権現垂迹縁起

一、天竺のマガダ国王は、妃たちが起こした惨事を嘆いて王位も国も捨て、「我が身はどこへ行けばよいのか決めかねている。この劍を投げて、落ちた所に行こう」と言つて五本の劍を北に向けて投げ、空飛ぶ黄金の車に乗つてこれを追いかけた。

五本の劍は日本に飛んで行き、一本は紀伊国牟婁郡神藏（神倉山）に、一本は筑紫の（忍穂耳を祀る）英彦山に、一本は（火明を祀る）陸奥中宮山に、一本は（伊弉冉を祀る）淡路の和（遊鶴羽峰）に、残る一本は（大穴牟遲あるいは大己貴を祀る）伯耆大山に落ちた。大王の車は、五本の劍を追いかけて英彦山に到つた。それから各地を転々とし、最後は第一の劍に従つて紀伊国牟婁郡に留まつた。

一、唐の天台山（紹興南東に聳える山）の地主神・王子信が鎮西英彦山に天降つた。その者は高さ三尺六寸で八角の水晶形をしていた。ついで、伊予の（伊弉諾を祀る）石鎚峰から淡路の遊鶴羽峰に渡り、さらに熊野の神倉峰に降つて、神武天皇の御世に熊野権現として垂迹した。

【地元の伝説】、「神武天皇は熊野の賊を退治できたことで、神倉山の頂きに登つて十握劍（一説では経津御魂）を捧げ持ち、天照大神（一説では高皇産靈）にお礼の言葉を申し述べた」

☆王子信については、天台山から飛来する山王として厚く尊敬され、中国はもとより奈良・

平安朝の文人たちにもなじみ深い人物だった。

☆『神道集』は熊野権現について、「天照大神の頃の人であるが、示現された土地は全国に広く行き渡っている」とする。

先のバラモン神の教えが倭国に流れ来たったのも、マガダ国王にまつわる熊野権現垂迹縁起が熊野の地に残るのも、シュメールに繋がるドラヴィダ系アンドラ王朝、もしくはマガダ国と何らかの接触があつたことだ。

このマガダ国王は、江南にそびえる天台道教の山王に担がれ、次に豊葦原中つ国の大国主や大穴持に昇り、さらに伊弉諾の養子となつて、神国・常世づくりの片棒を担ぐらしい。

では、彼はいつの頃に、何処に流れ着いたのか、どう動き回つたのか、以下から見通せるはずだ。①伊勢神道によると、豊受皇太神と日神は、伊弉諾の児として外内宮の主座（伊勢大神）に鎮座している。ならば、皇太神は日神の天照大御神とも同等の地位にあつて然るべきだが、なぜか記紀にその名が出てこない。ヒミコの名もわかりだ。筆者はこの二人の事績を明らかにして、邪馬台国の実態に迫るべく奮闘努力した。その結果、

「皇太神は出世の度に名を取り替えたことで、佐太大神、大国主、大穴持（大穴牟遲）、神皇産霊、国常立、熊野櫛御気野、豊受皇太神、御饌津神、月神、月読命、天照皇太神、天叢雲、天照大神、牛頭天王、豊受大神、高皇産霊の名を合わせ持った」と確信するに至つた。

この物語を通読すれば、豊受皇太神がこうした名で親しまれてきた経緯や、この二人が伊勢太神として祀られる経緯が容易に理解できるようになつていく。

『日本書紀』、「更に神を生みき。・・次に大日靈貴（天照大御神、向津姫）と号す。この子、光華明彩しくして、六合の内に照り徹る。二神（伊弉諾尊と伊弉冉尊）、早すみやかに天あめに送おくりまつつ

りて、授くるに天上あめの事を以てすべし』とのたまう。・・次に月の神を生みまつります。

月読つくよみ（月弓、月夜見）命という。・・次に蛭児ひるこを生む。・・次に素戔嗚尊を生みまつります」

②邪馬台国の最重要人物であるこの二神について、もう少し触れておきたい。豊受皇太神は記紀にその名が見当たらないものの、伊勢神道や真言密教の本地垂迹説、あるいは古社の縁起では頻繁に登場してくる。それだけではない。彼は日神よりも上位の神とされてきた。

外宮の伊勢神道や石上神宮の伝えるところでも、天照大神は男神とするし、学識の間でも「女神の天照大御神以前に、男神の天照大神が存在していた」と説く向きがいる。にもかかわらず記紀では、天照大（御）神は女神だけのごとく記されてきて、男神天照大神についての記載は一切見あたらない。それは、次のことに起因している。

「彼は伊弉諾の太子でありながら大乱の引き金を引き、政権まで転覆させた。それ故、帝紀や旧辞から抹殺された。だが彼の血を引く記紀の編纂者たちは、女神天照大御神の事績に男神のそれを密かにつけ足した。我々はそれも女神の事績と思ひ込ませられた」

③ここで、皇太神の生い立ちとともに、熊野権現事にある天竺のマガダ国王について考えてみたい。これを解く鍵はほぼ揃っている。

熊野縁起は「熊野権現は伊勢太神と団体である」とし、熱田縁起もこう伝える。

「熱田明神は、熊野権現、伊勢太神と一体分身である」、

「熱田明神の大日如来は、天照大神であり、天叢雲剣にほかならない」

物部氏家記の『ほつまつた多』も、天照大神が志摩伊雑に宮を置いたとする。その伊雑宮（三重県志摩市）は、徳川期の朝廷や将軍に訴状を出して、こう主張してきた。

「伊雑皇大神宮は日本最初の宮で、後に内宮ができ、ついで外宮ができた」

「当宮は天照大神を祀り、内宮の別宮（遙宮）である。伊勢太神は当地から遷された」

★熊野権現が伊勢太神と同体か否かについては、後白河院が熊野行幸を始めた一一六〇年の三年後に、議論が沸騰した。結果はこれを否定するところに落ち着いたが、筆者がこれに深く思いを巡らし、心にその意を悟った限りでは縁起どおり、熊野権現すなわち天竺のマガダ国王は、熱田明神、伊勢太神、男神の天照大神に他ならないと断じざるを得なかった。

④次に、彼の生い立ちはどうだったのか。いつの頃に、いかにして頭角を現してきたのか、いかなる業績をのこしたのか、これを解く鍵も揃っている。その一つは、出雲の加賀神社（松江市）に伝わる縁起にある。

「天照大神の生所とするために、加賀の潜戸くぐりどと名づけたり」

☆加賀神社は、伊奘諾・伊奘冉・天照大神・キサカ姫・猿田彦を祀る。この辺りには猿田彦の遊び育った伝説がやたらと残る。

『出雲国風土記』および佐太神社（松江市）の縁起、「（加賀潜戸は）佐太大神の生れあましし所なり。母のキサカ姫は『闇き岩屋なるかも』と言つて、金の弓矢を持ち射給いし時に、光輝けり。故、加賀と言う」

いま一つは、出雲大社と佐太神社がとり行う神在祭かみありにある。それは陰暦十月の神無月（出雲では神在月と呼ぶ）に、竜蛇神と呼ばれる「神のお使い」が南洋から島根半島に流れて来て、丁重に迎えられる儀式を言った。そのお使いとは、荒れた海から浜辺に打ちあげられる背黒海蛇（腹面が白く背の黒い毒海蛇、インド洋や太平洋に分布）のことだ。

背黒海蛇が神のお使いとされてきた所以は、両社の祭神がオロチであること、海蛇の鱗が六角形であること、白一色の胸辺りにぼつんとある黒い鱗が両社共通の亀甲神紋（六角形）に見

えることにある。つまり、南洋から海流に乗って流れ来る背黒海蛇の生態は、オロチと呼ばれる天照大神の生国や漂着先を教えているようであり、この御仁を尊ぶ両社の紋つきを羽織った格好までして、神（天照大神）のお使いとして誠に相応しい生き物なのだ。

⑤これでわかるように、皇太神の生い立ちは複雑極まりないが、簡潔にまとめるところなる。

「中国に渡来したマガダ国王は天台山にこもって修行していると、たちまち天台道教の山王に担がれた。その後は島根半島に流れて来て、しばし加賀潜戸で修行していた。そこでも、彼の仁徳や非凡さが知れ渡って佐太国の大穴持に、ついで杵築国の大国主に持ち上げられた。さらに豊葦原中つ国の建て直しを懇請され、神皇産霊や国常立を襲名して金の弓矢まで授かった。

当時、神国・常世づくりに四苦八苦していた伊奘諾は、大穴持が天竺の常世思想に加えて仏教・学問に並外れた才があると聞くや、天竺を凌ぐほどの常世を実現したいとして養子に取り込んだ。それと同時に彼の後釜として、豊葦原中つ國中興の祖・巖香具土いわのかぐつちにつながる巖香来雷いわのかぐつちを担ぎ出したのである」

その結果、大穴持は伊奘諾の愛児（真名子）となつてとんとん拍子に出世し、豊受（天照）皇太神の位に昇りつめた。その後は、義父とともに神国・常世づくりに走り回っていた。当時の国づくりを検証していくと、五帝期や天竺の真似ごとがそこ彼処から見つかるとはならずだ。

☆前五〇〇年頃、ガンジス川中流域にマガダ王国などいくつもの王国が誕生し、その一国のカピラ国（ネパール近辺）にサカ族のゴータマが生まれた。ゴータマは数々の修業を積んで輪廻を解脱し、仏陀（悟りを開いた者）としての自覚を得ると、悟りの道は万人に平等だと説いて回った。仏陀はバラモン神を嫌ったマガダ王父子やスダッタ長者から土地の寄進をうけて祇園精舎を建て、そこで教義を説いてきた。